E-LIFE　福祉用具専門相談員

志野優斗さん



「ケアマネジャー、リハビリ専門職との情報交換を通じて、利用者の希望や状態にあった適切な福祉用具を提案できるか」。福祉用具貸与事業者E－LIFE（横浜市、篠本高基社長）で働く志野優斗さんは、利用者の身体状況や生活環境を捉え、多職種と連携しながら適切な福祉用具を提案することを心がけている。新たに飛び込んだ介護業界で学びと実践を重ね、地域に必要とされる専門相談員を目指している。

一番身近で、気軽に相談できる相談員を目指す

福祉用具専門相談員の仕事を知ったのは、就職活動がきっかけだった。小学生の頃から吹奏楽に取組み、地域の介護施設や祭りなどで演奏してきた。高齢者にどうすれば楽しんでもらえるかを仲間と考え、企画から実行まで主体的に取り組んだ。

こうした経験から少子高齢化などの社会課題に関心を持つようになり、大学では社会環境学を専攻。音楽活動や大学での学びを生かしながら、これまでとは違う角度から高齢者の暮らしを支えたいと考え、就職活動を進めていた。

「介護は直接身体に触れて介助する仕事というイメージでした。しかし、福祉用具貸与という高齢者の活動や生活をさりげなく支えているサービスを知り、自分も福祉用具を通じて利用者の希望をかなえる仕事に携わりたいと感じました」と話す。

受け身から主体的な学習へ

入社後、最初に直面したのは覚えるべき知識の多さだった。「介護保険制度はもちろん、疾病や住環境、身体構造など必要な知識は多岐にわたり、覚えるだけでも一苦労でした。ただ覚えて終わりではなく、個々のケースに応じた提案につなげるためにも実践で活用する訓練を何度も繰り返しました」と振り返る。

同社では研修を体系化し、実践的なロールプレイングを重視する。上司が利用者やケアマネジャー、理学療法士などの役を演じ、サービス担当者会議や退院前カンファレンスを想定して質疑応答を行う。知識の正確さに加え、声の大きさや話す速度、相手との距離感も評価する。

利用者の自宅を想定した実地訓練では、靴のそろえ方やかばんの置き方、自宅内で歩行器を試す際の利用者の安全確保など、細かな所作まで学ぶ。

志野さんは今年5月に同社が開催した福祉用具専門相談員の提案力を鍛えるロールプレイング大会「カレッジキング２０２６」で、説明力やプレゼンテーションの内容が地域のケアマネジャーや福祉用具貸与事業所、福祉用具メーカーから高く評価され最優秀賞に選ばれた。「何度も練習に付き合ってくれた事業所の上司や同期がいてこその結果です。これからも利用者や関係する専門職のニーズに応えられるよう励みます」と話す。

医療職と連携し、選択肢を広げる

福祉用具の選定では、利用者の疾病や住環境などを総合的に考慮し、安全で、利用者本人が積極的に使いたいと思える福祉用具の提案を心掛けている。

なかでも、退院前の利用者への支援では、入院中にできる限り病院に足を運び、担当するリハビリ専門職や看護師と直接話して、利用者の身体状況を把握する。さらに、志野さんから、関連する福祉用具について従来機種から最新機種まで特徴や使い方を丁寧に説明。「身体の状態やリハビリの内容など、ケアマネジャーを通じた情報だけでは分からないこともあります。また、最新機種などの情報が医療現場に十分届いていないケースもあります。直接話すことで利用者の現在の状態だけでなく、今後の状態の変化も見据えた提案ができ、選定ミスを減らせます」と強調する。



カレッジキングでは地域専門職向けを想定した勉強会を実施

退院後には利用者宅で必要な福祉用具を実際に試し、適合状況を最終確認する。特殊寝台を利用する場合はテーブル、車いすならクッション、手すりなら異なる形状の製品を持参し、利用者自身が福祉用具のある生活をイメージできる工夫を行う。

「実際に福祉用具を体感していただくことで、機能やデザインだけではなく、掃除のしやすさなど生活上のこだわりも伝えてもらえるようになります。いろいろな用具を試してもらい、その人に合うものを見つけ、納得して活用いただけるよう心掛けています」と志野さん。

自分らしい工夫で地域とつながる

地域の専門職との関係づくりにも力を入れている。毎月ケアマネジャーに実績情報を届ける際、手書きのメッセージを添えたり、案内チラシには地域の雑学なども盛り込んで会話のきっかけづくりを惜しまない。このような取組みを半年以上続け、相談を受ける機会も増えてきたという。

また、要介護認定を受けている人だけではなく、幅広い層に福祉用具や介護を知ってほしいとの要望を受け、演奏会と併せて福祉用具の紹介をする機会もあったという。

「最初から福祉用具の勉強会を開いても人は集まりにくい。でも演奏会をきっかけに、福祉用具を知って『実は歩行に不安があるので、杖を使ってみたい』という相談に繋がったこともあります。より多くの人に介護や福祉用具について知ってもらうことが大切だと実感しました」（志野さん）。

今後は疾病や身体機能に関する知識をさらに深め、利用者一人ひとりに応じた提案力を磨きたいという。

「自分だからできることを考え続けて、選ばれる職員になりたい。そして、利用者やケアマネジャーにとって一番身近で、気軽に相談できる福祉用具専門相談員を目指します」と意気込む。



自宅を想定して利用者にわかりやすい用具の説明を実践